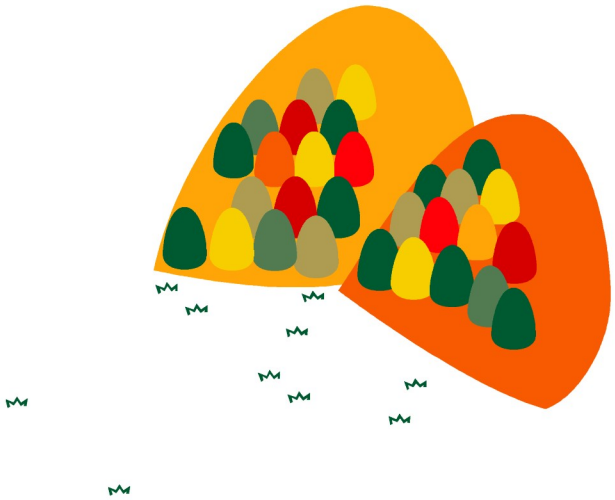
ひとりぼっちじゃないんだよ

お話のはじまり
はじまり

むかし　むかし。



うしくと　いうところに　なかねしょうという　がっこうがありました。がっこうには　なかねっぴぃーという　こどもたちのリーダーが　おりました。

中根

あるさむい　ふゆの日のことです。うしくに　おおゆきが　ふりました。なかねっぴぃーの　いえにも　たくさんのゆきがふりました。なかねっぴぃーが　にわで　ゆきかきを　していると
「たすけてー！」
と　さけぶ　こえがしました。
「あれ！どこから　きこえてくるんだろう？」
なかねっぴぃーが　にわを　みまわしても　だれもいません。ふと　あしもとをみると　アリさんが　ゆきに　うもれていました。
「あ！　かわいそうに」
なかねっぴぃーは　いそいで　アリさんを　ゆきの　したからたすけだしました。アリさんは　ないてよろこんで
「きっと　おんがえしをします」
そういって　すに　もどっていきました。

中很

あるなつのひのことです。がっこうの　きょうしつに　ひとりの男の子が　おりました。男の子は　まどごしにみえる　うつくしいゆうひを　みつめながら　めに　おおつぶの　なみだを　うかべていました。男の子は　ひとりぼっちだったのです。おとうさんと　おかあさんを　びょうきで　なくしてしまったのです。
「ぼくなんか　うまれて　こなければ　よかったんだ！」
と　かんがえて　ばかり。すっかり　こころを　やんでしまったのです。なかねっぴぃーは　いつかきっと　げんきに　なると　しんじ　はなしをきいたり　はげましたり　いっしょに　はなを　そだてたりしました。しかし　いっこうに　げんきになりません。

夏木

あるあさのことです。ふと　いいかんがえが　うかびました。
「そうだ。ともだちに　きょうりょくして　もらえばいいんだ」
こうして　なかねっぴぃーは　がっこうじゅうの　ともだちと
ひとりぼっちの男の子を　たすけることにしたのです。
　ところが　ふつかたっても　みっかたっても　ひとりぼっちの
男の子は　いっこうにげんきに　なりません。むしろ　さびしさ
や　かなしさが　ますます　ふかくなっていくようでした。
「このままではいけない。なんとかしなくては！」
なかねっぴぃーは　こまりはてていました。

そんなあるひのことです。アリさんが　なかねっぴぃーの　まくらもとに　たって　いうのでした。
「なかねっぴぃーよ。なかねっぴぃーよ。わたしは　ふゆに　たすけていただいた　アリです。男の子のことで　なやんでいることを　ウグイスさんにきいて　おどろいて　やってきました」
なかねっぴぃーは　おどろきましたが　なみだながらに　はなしを　はじめました。
「ひとりぼっちで　くるしんでいる　男の子を　げんきに　できなくて　こまっています。なんとか　できないでしょうか。」
はなしをきいたアリさんは　ひとりぼっちの男の子に　まほうをかけました。
「チチンプイプイ。チチンプイプイ。ひとりぼっちの男の子よ。かかわりあい　まなびあって　げんきに　なーれ」

中秋

すると どうでしょう。たくさんのひとが　ひとりぼっちの男の子に　かかわってくれるようになったのです。こまっていると　やさしく　おしえてくれたり　はげまして　くれたのです。

あるひの　じゅぎょうでのことです。男の子が　わからなくてこまっているときのことです。となりの　女の子から
「どうしたの　わからないこと　あるの？」
と　やさしく　こえをかけられたのです。うれしくなった　男の子は　おもわず
「うん。わからないことがあるんだ。おしえて」
と　いってしまったのです。それがきっかけで　わからないときには
「おしえて・・・」
と　女の子や　ともだちに　きくことが　できるようになったのです。

こうして　男の子は　たくさんの　ともだちと　まなびあうことが　できるようになったのです。するとどうでしょう。まなびあえば　あうほど　みるみるげんきに　なったのです。それは「ぼくが　ひとりぼっちじゃないんだ」と　おもえたからです。いつのまにか　男の子のまわりには　たくさんの　ともだちのわがひろがっていきました。ともだちがふえれば　ふえるほど　男の子はえがお　いっぱいになっていくのでした。じつは　アリさんは　なかねしょうの　かみさまだったのです。

やがて　男の子は　なかねっぴぃーや　なかねしょうの　かみさまに　みまもられながら　ひとりぼっちを　つくらないないよう　すすんで　まなびあうように　なりました。すると　がっこうじゅうに　きれいな　まなびあいの　はなが　あちこちに　さきほこり　たくさんの　ともだちが　えがおいっぱい　しあわせいっぱいになっていったのでした。

お話のおしまい

牛久市立中根小学校

監修　長谷川　安　男
文　飯　田　昭　夫
絵　桑　名　真　理